# 新島襄と徳富蘇峰

徳富蘇峰

河野仁昭

## 1

徳富猪一郎（蘇峰）が、新島襄のいわゆる自責打掌事件を契機に、明治十三年五月、卒業を一カ月後にひかえていたにもかかわらず退学したことはよく知られている。卒業までとどまるようにという新島の説得を振り切っての退学であった。「大人とならんと欲せば自ら大人と思ふ勿れ」と裏面に墨書して、新島は自身の写真を徳富に与えた。この餞別の写真を徳富が生涯大切に所持していたことは、いまもそれが東京大田区の徳富記念館（山王草堂）に伝わっていることによって知ることができる。

徳富と新島が再会したのは、六カ月後の十一月である。九州伝道に出かけていた新島は、スケジュールを終えて

熊本の百貫港から帰途につこうとしたが、風向きが悪くて船が来なかったため市内へ引き返した。翌十一月二十八日の夜、新島の宿へ徳富がたずねてきたのである。徳富は退学して上京し、新聞記者になろうとしたのだが、志を得ずに熊本へ帰ってきたところであった。二人は夜十一時ころまで話あった。「これが為に両者の間に於ける蟠り(わだかまり)も解け」(『蘇峰自伝』)たと、徳富は書いている。

ついで明治十五年の夏、上京の途次に徳富は新島邸をたずねて宿泊した。わだかまりは解けていたとはいうものの、徳富のすべてを新島は肯定していたわけではない。徳富は退学後まもなく信仰までも捨てていたのである。彼が寝ようとしたところへ新島がやってきて、「是非この所を一読して、然る後床に就いて貰ひ度い」(同右)と、声を震わせていいながら聖書を差し出して徳富を閉口させた。

宿泊してのち、彼は新島に誘われるまま、伊勢時雄、湯浅吉郎らと新島の供をして中山道を安中まで歩いた。新島はその道中、徳富に説教して止まなかったということも、徳富は書いている。恩師の懇切な勧めにもかかわらず、徳富はすでに信仰を復活しえないところまで立ち至っていた。だが二人の信頼と愛は生涯そこなわれることはなかった。『蘇峰自伝』に次のような書かれている。

「予は同志社に在学中、まだ一回も新島先生其人に対して、不平を抱いた事は無った。正直にいえば予は新島先生に於て先生らしき先生を見出したのであった。先生は政治とか経済とか云ふ点よりも寧ろ科学とか数学とか機械学(幾何学?—引用者注)とか云ふ方に長じて居られた。併し何れかと云へば先生は頭の人でなく、心の人であった。先生は山をも動かす信仰を有って居り、石をも泣かせる情熱を有って居た。人間であれば何人も欠点がある。先生は決して欠点なしとはいはぬが、実に日本男児の立派なる標本であった。予は自ら先生の如き人に会うたのを幸福とするものである。予は自ら先生を訪ねて、京都に赴いたことを、予の一生涯に於て、最も幸福なる一と信じてゐる」

熊本洋学校が閉鎖されて東京英語学校(のちの第一高等学校)に学んでいた徳富は、入学して間もない明治九年十月ころ同志社英学校へ移ってきたのである。そして十二月三日、新島の仮寓に京都第二公会が設立されたとき、彼は先輩の金森通倫らと共に新島から洗礼を受けた。「謂はばキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを経由して、神に近付くと云ふよりも、新島先生を経由して、神に近付くと云ふ事であった」(同右)と、徳富は述懐している。

その新島に、徳富は退学を除いて三度、労を煩わせたことがあった。最初はデビュー作『将来之日本』の序文依頼であり、二度目は弟健次郎の恋愛問題、最後は『国民新聞』創業に当って借金の保証人になってもらったことである。

## 2

徳富蘇峰が経済雑誌社の田口卯吉の推薦によって、同社から『将来之日本』を出版したのは明治十九年十月である。これによって徳富が論壇に出たことは周知のことであり、彼は将来の見通しを得て熊本へ家族を連れに帰り、居を東京へ移した。

新島　襄

出版してほどなく、徳富はこれを新島に送った。新島は同年十二月七日付の徳富あての手紙に、「先般御帰郷後ニ於、御近著将来之日本御送付被下鳴謝之至ニ不堪候、小先之手ニ入るや否他より借手有之、今ニ小生之手許ニ返リ不来候、何レ返リ来候ハバ拝読可仕ト存居候」と書いている。新島の書斎の蔵書と同様、生徒が借りて行ったのであろう。同志社英学校の生徒たちが競ってこれを読んだことは、弟徳富健次郎(蘆花)の『黒い眼と茶色の目』に活写されている。

徳富が新島に序文を依頼したのは、再版の準備中であった。明治二十年二月二日付の手紙で、新島は種々の事情を説明して婉曲に断わりをのべている。

「先書御申越之次第ニよれば、小生ニ御近著将来之日本ニ批評ヲ頼ムトノ事ニ有之候得共、貴君御承知之通、小生之脳鈍ニ筆渋リ中々其任ニ当リ難き想有之、全く御辞退申上度候得共、又一言なき能いずとも思ひ居候共、一月来毎度心臓之加減宜しからず、加之親戚敝家之混雑旁大延引ニ相成候、何レ何カ相試度候得共、定而御再版之義御急キなるべく、されば小生ハ御省キ被下候方カ得策ならんかと存候」

「大延引ニ相成」とあるから、新島は書こうとしていた

のかも知れない。この年の一月二十七日に八重の姪であり伊勢時雄の妻であった峰が病没して翌日告別式がおこなわれ、さらに一月三十日には新島の父民治が永眠、二月一日に告別式をとりおこなった。「親戚敵家之混雑」というのはこのことで、確かに肩の張る文章など書くべくもなかったろう。思うままをのべる手紙はともかく、活版にして公表する文章については、新島は慎重の上にも慎重であった。だから滅多にそういう文章は書かない人で、その点徳富とは全く対照的である。

ついで徳富あての二月二十五日付の手紙で新島は『国民之友』の創刊号（明治二十年二月創刊）を贈られたことについて礼をのべたあと、「先日御依頼ニ及候所ノ将来之日本第三版ニハ何ニカ間ニ合セ度候間、漸時御待被下度候、此度ハ是非不肖ナガラ御求ニ応度存候」と、承諾の意を伝えている。

徳富は新島が公にする文章を容易に書かない人であることを、十分承知していたはずである。また、東京方面では新島や同志社英学校については、キリスト教会や教育界を除いてほとんど知られてもいなかった。徳富自身も後年、「同志社大学運動までは、新島先生は殆んど一種の箱入り娘も同様であったが、この運動のために先生は大なる日本の宗教家であるばかりでなく、大なる教育家、大なる社会人、大なる愛国者、大なる公人として、天下より認識せらるるに至った」（『わが交遊録』中公文庫版―以下同）と語っているのである。あとでのべるように、新島のその運動を全面的にバックアップしたのは、民友社社主の徳富蘇峰その人であった。

筆の重い新島にあえて「序文」を寄せてもらったとしても、新島は知名の士とはいいがたかったし、ましてやキリスト教徒であってみれば、世俗的な意味においては徳富の名誉になることでも、著書の売れ行きが増加するわけでもなかったとみるべきであろう。にもかかわらず再度にわたって寄稿を懇請したのは、新島に対する礼節と報恩の念にもとづくことであったと思われる。この人こそは自分の恩師であることを、成功した最初の著書に明記することによってである。

新島の苦心の「序文」を掲げた第三版の「緒言」に、徳富は次のように記している。

「首ヲ転スレハ既ニ十年、余カ西京ノ同志社ニ在ルヤ、屢々新島先生ノ教ヲ奉ス、不肖ニシテ未タ先生ノ望ニ副フ能ハスト雖トモ、余豈ニ平生服膺スル所ナカランヤ、而シテ今ヤ此ノ冊子ヲ先生ノ電覧ニ供シ、併セテ先生ノ一言ヲ巻頭ニ掲クル事ヲ辱フス」

新島の「序文」の草稿は三点遺されていて、うち二点

は判読し得ぬまでに加筆訂正の筆が加えられている。苦心の痕跡である。

その新島の「序文」はごく短いものだが、その中で彼が特に筆をさいているのは、徳富が平民主義を標榜していることについてで、徳富のいう「愛国」は「全国ヲ愛スル」ことであり、「全国ヲ愛スルハ全国民ヲシテ其ノ生ヲ楽ミ、其ノ宜キヲ得セシムル」ことだと指摘する。新島自身「愛国」ではなく「愛人」を説いていたのである。

また、平民主義は「貴族社会ヲ一掃」することを意図するものだという指摘も興味ぶかい。やがておこる一致教会と組合教会の合同問題において、一致は中央集権政治であり「貴族政治」だと新島はとなえるのである。だから「序文」はおざなりの美辞麗句を連らねたものではなく、断片的ながら新島自身の思想を『将来之日本』に重ねあわせて論述したものだといってよい。

3

弟健次郎の問題や、『国民新聞』創業資金借入れの保証人などに言及するいとまはないから、徳富の依頼に新島は快く応じたというにとどめたい。

徳富蘇峰が新島襄の大学設立募金運動に東京で支援活動を展開するのは、明治二十一年に入ってからであった。新島自身も十七年四月に二度目の外遊に旅立って以来、本格的な取り組み再開にはまだ至っていなかった。

二十一年二月『国民之友』は創刊一周年を迎え、購読者は着実に増加して、経営基盤はほぼ固まったといってよかった。徳富が協力にのりだしてくるのはそれからである。

「二十年の二月には、『国民之友』を発刊した。当時予の心境を語れば、これまで随分新島先生に心配もかけ、苦労もさせたと思う。せめて今後は先生の仕事に及ばずながらその代償というではないが、安心と慰楽とを与えたいと考え、それには同志社大学創立のことに、微力を効すが第一であると考えたから、予も爾来、先生が明治二十三年一月二十三日、大磯に於て永眠せらるるまで、いささか力を尽した積りである」（『わが交遊録』）

徳富は筆をついで、「予は別段同志社そのものに対して愛着を持たなかったが、同志社に力を竭すことが先生に対する恩を報ずる所以」だと考えて力を尽したのだといっている。

「先生に対する恩」ということばには、二十年十二月に新島の説得を振り切って同志社を去った健次郎の問題も含まれているだろう。健次郎は死期を悟ってか、絶交を

つづけていた蘇峰を電報で伊香保へ呼んだとき、病床で「新島先生には負債がある」といった。「予は先生の負債は、兄が代りて皆済したから、安心せよと慰めた」（『蘇峰自伝』）と徳富は語っているのである。数時間後に健次郎は死んだ。

北垣国道京都府知事らのバックアップを得て、知恩院での大学設立大集会を成功させてまもない二十一年四月十八日、東上した新島は湯浅治郎宅に立ち寄った。すると徳富が迎えにきて、新島を自宅へ案内して一泊してもらっている。おそらく両親らが新島に直接礼をいいたかったからにちがいない。

それはともかく、『国民之友』創刊一周年を経たばかりの三月一日、新島は次のような手紙を徳富に送っている。

「御申越之事ハ小生ニ取リ是非相願度一条ニ候間、直ニ是迄之録事為写御送付可仕候間、何卒専門校必要之点充分御論ジ被下度候」

徳富は新島が企てている運動について『国民之友』に何か書きたいから、参考資料を送ってほしいといってきたにちがいないのである。

当時は京都の協力者の意向もあって、創立すべき学校を「明治専門学校」としていた。これを「同志社大学」と改めるのは、同年三月二十四日付の手紙で徳富が、「同志社大学」としたほうが「明快」でよいと新島に進言してのちである。「是迄之録事」というのは校務日誌のことで、『同志社英学校記事』『同志社英学校沿革』『同志社記事』その他、新島自筆のものが数冊現存する。これらのうちのどれかを筆写して送ったのだろう。

さらに徳富あての三月四日付の手紙で新島は、「貴命ニ応ジ明治専門校之記事大略々記御逓送申上候間、御斟酌之上御採用有之度候」と、資料を追加して送った旨を知らせている。

徳富がこのとき『国民之友』第十七号（明治二十一年三月）に発表したのは、「福沢諭吉君と新島襄君」という論説で、これが日本人の手になる最初の本格的な新島論である。徳富はこのとき僅かに二十五歳であった。彼は福沢と新島は教育界の双璧であり、共に外国文化を日本に輸入してきた。ただし、福沢は文化の花の部分を、新島は根の部分を輸入したと両者を対比し、福沢の事業はすでに完成の域に達しているが、新島の事業は緒についたばかりだとして支援を訴えている。

つづく第十八号には「私立大学」と題した無署名の記事を掲げ、「教育とは唯た書を読み、学を修め、利巧者になる迄の事なりと極まりたる今日に於ては、独立自治の生面を開き、仰いて天に愧ちず、俯して人に怍ちず、良

心を手腕に運用する人物を養成するの私立学校は、殊に必要とするに非すや」と書いている。この年の十一月に公表される「同志社大学設立の旨意」を彷彿たらしめるのである。

彼の協力は以上にとどまらなかった。第十九号には別冊付録をつけ、その巻頭に金森通倫が新島の代理として東京の五大新聞・雑誌の記者を料亭に招いておこなったアピール「同志社の規模及其目的」の全文が掲載されている。この記者招待会は徳富の斡旋によるものであった。また、付録をつけた第十九号の本誌には、徳富の手になる論説「人民の手に依りて成る大学」が掲げられている。

こうした『国民之友』誌上でのバックアップに加えて、新島が東上する四月十八日前後からは新島と手紙で連絡をとりながら、徳富は協力が得られそうな政治家との事前折衝をおこなっている。陸奥宗光や井上馨らがそうで、いずれも徳富がかねて知遇を得ている人たちであった。これらの人たちの新島に対する協力は、やがて大隈重信外相官邸での小集会に発展するのである。

徳富は新島のいわば私的な面についても配慮を怠ることがなかった。井上馨邸での集会中に倒れた新島が、五月下旬から六月上旬にかけて富田鉄之助夫妻の斡旋で鎌倉の海浜院に入院したとき、徳富はいち早く見舞って付添い看護婦を派遣している。この年の夏二カ月ばかり新島が伊香保で静養したときには、東京から民友社の社員を付添わせたのみか、静養先で新島の身のまわりの世話までもさせたのであった。これらのことは何でもないことのようだが、『国民之友』の編集発行と、販売先の拡張で繁忙を極めていたなかでのことであったことを思うべきであろう。

徳富は静養中の新島に、健康にさわるから長文の手紙を書いたり来訪者にいちいち面談することはさしひかえてはどうかと、しばしば忠告したらしい。新島は、その注意を守ってはがきで用を済ましていると返事を書いているが、事実は必ずしもそうでなかった。

大学設立運動に関する手紙以外に、もしくはそれと抱き合わせで、新島は教会合同問題についても逐一徳富に報告し、また依頼の手紙を送っている。すでに早く教会を離れており、新島の勧めにも応じなかった徳富にである。彼にだけは腹蔵なしになにごとでも打ち明けられたし、頼むことが出来たのである。次はその一例である。

「而シテ（教会合同の）憲法ヲ以テ之ヲ決行スルニ至ラバ、我カ教会ハ将来貴族的独断的政治ノ下ニ生息シ、百年ノ後ニ至ラバ吾人ノ当時甘受スル所ノ自由ハ何レヘカ消滅シ去ントスルハ、本日ヨリ断言仕ルベシ、小生近頃

黙止。スト申居候間、以上ノ言ハ誰レモ他人ニ語ルニアラズ、小生ノ最信用致候徳富猪一郎君迄、噴火山之勃々ト其焔を吐出スルが如ク吐露スルノミ、嗚呼」

明治二十二年五月十二日付、徳富あての手紙の結びの部分である。新島にとって徳富がいかなる存在であったかが察せられる。この前年十一月に公表された「同志社大学設立の旨意」が、新島から資料の提供を受けて徳富が起草したものであることは、当時の新島の手紙からも十分に明らかである（拙稿「新島襄の大学設立運動⑤」『同志社談叢』第十三号参照）。この年、「同志社寄付行為」の前身である「同志社通則」が制定されるが、その草案もまた徳富の起草であった。新島は徳富を社員に加えるよう同志社社員会に推挙している。

徳富の勧めに応じて静養に赴いた大磯の百足屋で、新島は四十七年の生涯を閉じた。新島危篤の電報を徳富が受け取ったのは、『国民新聞』創刊披露の祝賀会を芝公園内の三緑亭で催す日で、彼は床屋へ顔を剃りに行っていたときであった。使いの人がそこへ届けに来たのである。招待客の接待を湯浅治郎に託し、万一をおもんばかって小崎弘道に大磯へ急行するよう打電して、徳富は大磯へ馳け付けたのであった（『わが交遊録』）。披露宴に招かれた客の中には、このような日に主催者がいないとはなにごとかと苦情をいう者もいたと、徳富はもらしている。

（同志社社史資料室長）